

入選

教えてくれた

長野県 鉢盛中学校

2年 遠藤明莉

いつの日か、学校が嫌になった。

小学5年生のときの私だ。急に嫌になった。理由は分からない。1日休んだら、次の日行くのが怖くて行けなかった。そんな日々が続いた。いわゆる、不登校というやつになったと気がついた。自分は絶対ならないだろう、と思っていたのに。

それから半年ほどが経ち、10月になった。音楽会があると聞いてお母さんと見に行ってみた。5年生の番が来た。泣いた。どうして私はあそこに立っていないのだろう。私は何がしたいのだろうと思い、声を殺して泣いた。それから卒業式、入学式があり、6年生になった。

お母さんと、6年生になったら保健室登校でもいいから、1週間に1回は学校に行こう、と約束した。保健室の先生は優しかった。そして、担任の先生はそのことをみんなに言ったらしい。

約1年ぶりに行く学校、敷地内に入るだけでも緊張した。校門から昇降口までがとても遠く感じた。中庭では、同じクラスの人たちがいつも鬼ごっこをしていた。その中に、親友がいて私に気がつくと、こちらに走って来てくれた。それがとても嬉しかった。

それから2ヶ月ほどたち、親友が保健室まで来てくれて、2時休みに鬼ごっこに誘ってくれた。最初は怖かったけれど、いつの間にかそれが毎日の楽しみになっていた。帰るときもそうだ。わざわざ保健室までむかえに来てくれて、「いっしょに帰ろっ!」とさそってくれた。家の方向が同じなので、2人でいつも帰っていた。毎日いろいろな話をした。ゲームの話、ペットの話、好きなアニメの話……。

退屈だと思っていた毎日が、いつの間にか大好きになっていた。10月には運動会があった。緊張していた私に対して、親友はいつもどおり接してくれて、ずっとそばにいてくれた。その後の修学旅行もそうだ。グループも、部屋割も同じにしてくれた。それがどんなに心強かっただろうか。その子とは家も近くて、保育園からの仲で、必然的に中学まではいっしょと思っていた。でも、聞いてみると、その子は違う中学に行くらしかった。ショックだった。

その日から、1日1日が早く感じた。ついに、卒業式の日が来た。私は泣きながらその子に、「ありがとう」とだけ言った。それからは、いっぱい笑った。

中学にあがったら、部活もあるし、勉強もあるし……、多分忙しくなる。だから、私たちは春休み中にたくさん遊んだ。そのときに、中学でもがんばろうと約束をした。今でも覚えている。

今年で中学2年生になった私。今はもう、となりにいないけれど、自分は一人ではないと教えてくれたあの子。つらかった、苦しかった、きつかった……、けれど!もう大丈夫。

一人ではないと教えてくれたから。たった一人の親友。私の一生の思い出。